

佳作

『生きてます、15歳』から学んだ生きる勇氣

鹿児島県 鹿屋市立鹿屋女子高等学校一年 若松 里奈

生きる。私は、今まで「このことについて深く考えたことがなかった。私にとって生きている」といつとはなく普通のこと。一日一日が過ぎていくのもあたりまえのことのように感じていた。でもこの本に出会っていろいろなことを考え、教えられたこともたくさんあった。

この本の主人公の女性は、五百グラムで生まれてきた。いくら赤ちゃんといっても、小さすぎる。こんなに小さな自分の子どもを見て両

持ちでいっぱいだった。そして自分を責めた。

こんな子どもを産んでしまったことを。

そして、立ち直るのにも、とても時間がかかった。でも、「この子を守ってあげられるのは自分しかない」と自分自身を励まし、頑張っていくことを決意した。

私は、この言葉を目にしたとき、「なんて強いんだろう。これから大変なことはかりなのに、全てを受け止めることができるなんて」「とその覚悟に胸を打たれた。ちょっと嫌なことがあるとすぐにイライラしてしまう、周りにいる家族や友達について変な態度をとってしまう、そんな

親はどう思っただろう。それに医師からは、「この子はまったく目が見えません」と言われた。

小さすぎる自分の子どもと、信じられない医師からの言葉を聞き、冷静でいられるだろうか。私は思った。私なら絶対に耐えられない。毎日を泣いて過ごすと思う。もちろん私だけではなくほとんどの人がそう思うはずだ。

この女性には、父親がいなかった。母親も医師からの言葉を聞いたときは、信じられない気分が情けなく思えた。

それから、二人の生活が始まる。「この女の子の母親は決して甘く育てることはしなかった。障害を持っているからこそ厳しくしつけをした。転んでも自分で立ちあがるまでは、絶対に手はかさない。私はこの二人の会話や、毎日の行動を知り、親子の絆というものは、どんなものにも変えられないくらい深いものなのかもしれない。そしてどんなに辛いことがあってもその辛さを忘れさせてくれる。そんな大切な何かを持っているのではないかと思った。この二人は何をするときも一緒だった。泣くときはお

もいっきり泣いて、ケンカも毎日のようにした。その喜びは倍になった。何も特別なことをしているわけでないのに「一緒にいることがお互いの何よりも支えだったのだ」と思っ。

そしてこの女性は、一点の作文を書いた。素直な気持ちで自分の思いを書いた。その作文が全国で最優秀賞をとったのだ。この女の子そして母親は、これまでいろいろなことを考え、一日一日をむだにしないように生きてきた。何度も大きな壁にぶつかったけれど、もうこれ以上の苦しみはないというほど悩んで解決すればまた新たな次の問題がでてくる。そういうこと

できないと思っ。

私はこの親子に伝えたいことがある。それは私に「勇気」と前を向いていくことの大切さを教えてくださって本当に「ありがとう。」というメッセージだ。

もし、今後自分の心が弱い方へ傾き始めたら毎日毎日を精一杯生きて頑張っていこうと思っ。

のくり返しだった。それでも、親子だから乗りこえることができた。一番信頼できる間柄だからだ。だからこそ、苦しいこともはねのけて、前向きに歩くことができたのだと思っ。

私は、この本を読んで、「毎日をぼんやり過ごすことはやめよう」と思っ。何か一つでも今日はこれでよかったなあと思えることをしようと思っ。この女性は、目の不自由を持つていながらもしっかりと前を向いて一日一日成長していったと思っ。障害のある人が一生懸命生きているのに、何も不自由のない私が、せっかく与えられた一日一日をむだにすることは

